

あまのじゃく

24期 徳田完二

私には妙にあまのじゃくなところがあって、大勢の人が関心を持っているものと距離を取らなくなったり、「みんな」と違うことをしようとしたりする傾向がある。

たとえば、長い行列ができている店には入りたがらない。家からわりあい近いところに人気のラーメン店があるのだが、その順番待ちの長い列に並ぶ気にならないのである。あるいは、書店で大量に平積みされているような「話題の本」は読まない。一例をあげれば村上春樹の小説がある。ある時期まではそれなりに読んでいたが、彼がノーベル文学賞を取るのではないかと憶測が話題に上ったり、ハルキストなる言葉が広く知られるようになってからはあまり読まなくなった。彼の新作が出るのを待ちかまえていたファンが発売初日に書店へ押しかけるような風潮が見られるようになってからはすっかり敬遠している。読めば面白いだろうとは思っているのだが、どうも読む気が湧いてこない。そこがあまのじゃくのあまのじゃくたるところである。

こういうこと背景には、群れることを好まない傾向や、人と同じでいたくない気持ちがあるのだと思う。それに関わって、「真面目な」席で「ただ真面目なだけ」の話をしたくないという気持ちもある。たとえば、卒業式などの祝辞で「みなさんが、これまでに学んだことを糧にして、世界に羽ばたくことを期待します」といったようなありふれた言葉を——他の人が言うのはいっこうにかまわないけれど——自分ではあまり言いたくない。

以前、大学で研究科長（大学院の長）を三年ほどしたことがある。その折り、修了生一人ひとりに学位記を手渡したあと祝辞を述べなければならなかった。その時も先に述べたような「ただ真面目なだけ」の話はなるべくせず、冗談めかしたことを混ぜ込むのが常だった。たとえば、「祝」という字が「呪」と同じつくりであることに引っかけて冗談を交えたりした。

また、研究科長が交代する際には、教員や学生の前で後任者が前任者に言葉を贈るのが習わしだったのだが、私が贈る言葉を伝えるめぐりになった時はとことんジョークに徹した。前任者のことを、おみくじの「学問」「待ち人」「失せ物」「商売」「恋愛」「結婚」などから始めていじったところ、けっこう受けた。前任者は、悪意はないが周囲の人にとっては「ちょっと困ったとこと」を時々する人で、そこを突いたのがヒットしたのである。そんなことが許されたのは、前任者の人柄やわたしとの関係性、また教員も学生も含めた大学院全体の雰囲気のためであり、そういうことを考えもせず「わるふざけ」をしたわけではない。

あまのじゃくの大元は何なのか。ユニークな存在でありたいと思いつつも、まわりの人より傑出したところを示す能力がないため、ちょっとふざけて見せることで自分の特徴を出そうとしているのだろうか。あるいは、まわりの人とは違うことをして自分の存在意義を自己確認しようとしているのだろうか。あれこれ考えてみるが、自分でもよくわからない。そう言え

ば、父にも似たところがあった。私のあまのじゃくにはDNAが多少なりとも関わっているの
だろう。

連載ミニエッセイ 20

乗馬体験

ウマ年生まれの子なのかどうか、私は馬が好きだ。と言っても、競馬好きというわけでは
ない。馬という動物が好きなのである。実は私は乗馬の経験が少しだけある。

北海道に住んでいたころ、当時中一だった末娘が「入りたい部活がない」と言うので、乗馬
を習ったらどうかと勧めてみた。娘は幼いころから大の動物好きだったので、興味を持つと思
ったのである。少々経費はかさむが、娘が中学時代を無為に過ごすよりは――親としてはそう
考えた。水を向けると、案の定、娘は興味を示した。そこで、札幌郊外の自宅から車で数分の
ところにある小さな乗馬クラブへ連れて行った。そこで乗馬のレッスンを受けられることは前
から知っていた。

こうして、娘は日曜日ごとにレッスンを受けることになった。私は、毎回車で娘を送り迎え
するだけなのもつまらないと思い、自分も同時にレッスンを受けることにした。レッスンは個
別指導なので、娘とは別の指導者から教わった。

初めて馬の背にまたがったときの第一印象は、急に視点が高くなって、とても見晴らしがよ
くなるということだった。馬は思っていた以上に「背が高い」のである。地面に立っている人
を見下ろす感じになるため、なんだか偉くなったような気にもした。それはけっこう心地よい
体験だった。

レッスンを受け始めてから感じたのは、乗馬が人と馬とのコミュニケーションによって成り
立っていることだった。たとえば、「動け」という指示は両足のかかとで馬の腹を軽く締めつ
けることで伝わる。また、「止まれ」は両手の手綱を均等に軽く引くことで、「曲がれ」は曲
がってほしい方の手綱をほんの少し引くことで伝わる。もちろん、こういうささやかな合図で
こちらの意図が伝わるのは、馬がよく訓練されているからであるが、調教された馬は上のような合図に実によく応えてくれるのでうれしくなる。ここが車の「運転」との大きな違いだと思
った。

馬の歩き方や走り方には、ゆっくり歩く「並足」、軽く走る「軽早足」、普通に走る「早
足」、そして力強く走る「ギャロップ」（競馬の走り方）があり、レッスンはこの順番で進
む。それぞれの走法に習熟するまでにそれなりに時間を要するので、段階が進んでいくスピー
ドはゆっくりだった。春ごろからレッスンを始め、季節はやがて冬になった。冬の馬場は雪で
一面真っ白になる。雪原を馬の背に乗って走るのはすこぶる快適だった。

ところが、レッスンを受け始めた次の年度、私は京都に単身赴任することになった。そのため、月に一回だけ札幌に帰るのが生活パターンになり、乗馬のレッスンも月一回になった。その間も娘は毎週通っていたので、私よりずっと早く先の段階に進んだ。いつの間にか、ギャロップまでできるようになり、さらには障害物を飛び越える練習をするまでになった。私の方は、娘にだいぶ遅れてギャロップに進んだ。ギャロップは、これぞ乗馬、という感じの走り方だと思っていたので、ようやくここまでたどり着いたと喜んだのだが、間もなく家族全体が京都に移住することになり、ギャロップで馬を駆る楽しさを十分味わう前に乗馬のレッスンは中断してしまった。残念無念だったが、仕方がなかった。

関西にも乗馬クラブはあるが、家に近くて気軽に行けるところではないので、私の乗馬体験はあれきりである。娘の方は、関西で就職してから乗馬を再開したが、経費がかさむなどのことから長続きしなかった。

できることなら、真っ白な雪原をもう一度駆けてみたいものだと思う。